

# Nettipakarāṇaの註釈文献について

古 山 健 一

## 1. はじめに

ミャンマー（ビルマ）の三蔵において経蔵小部に収められている *Nettipakarāṇa*（以下Nett）には、主要な註釈文献として、①*Netti-aṭṭhakathā*（以下Nett-a）、②*Netti-ṭīkā*（以下Nett-pt）、③*Nettipakarāṇa-gaṇḍhi*（以下Nett-gp）、④*Netti-vibhāvinī*（以下Nett-t）、⑤*Peṭakālaṅkāra*（以下Nett-mht）の5書が知られている。本稿は、これらの5書に関して、筆者（古山）が目下のところ知り得ている情報に基づき、各々の解題を示し、向後のNett研究の便に供することを目的とする。

筆者はこれまで、「*ṭīkā*文献におけるpakarāṇa-naya及びnetti-nayaについて」（『印度學佛教學研究』53-2、2005年）と「パーリ四部ティーカに現れるnettiyamの語を含む引用文」<sup>(2)</sup>（国際仏教徒協会『佛教研究』34、2006年）を公表し、パーリ経蔵四部の*ṭīkā*（復註）類におけるNettの引用・紹介という観点から、テーラワダ仏教の伝統への同書の受容と消化の様相を明らかにしてきた。本稿は、Nettに対する註釈書の撰述という観点から、同書のテーラワダ仏教の伝統への受容と消化を概観することで、テーラワダ仏教の伝統教学におけるNettの研究史を明らかにしようとする試みの、その序説ともなり得ると考える。

以下、上記①～⑤の順に各書の解題を示す。筆者の無知なる点については、識者諸賢のご教示とご指摘を乞いたい。

## 2. *Netti-aṭṭhakathā*

*Netti-aṭṭhakathā*（Nett-a）は、大凡A.D.5-6c頃<sup>(3)</sup>に活躍したとされる大註釈家のDhammapālaが造論したNettに対する一次的義疏であり、現存最古の註釈書である。

本書は現存しており、刊本として、ミャンマーBuddhasanasamiti版（ミャンマー第6結集版、1960）、スリランカSimon Hewavitarne Bequest版（1921）、タ

イ Mahachulalongkon Ratchawitthayalai版 (タイ王室版、1995)、タイ Munnithi Phumiphalo Phikkhu版 (1983)、インド Vipassana Research Institute版 (1998) がある。また、NettのPTS版 (1902) には、*Extracts from the Commentary* として、Nett-aの一部が掲載されている [R° 194-249]。

*Gandhavaṃsa* (以下Gv) でのDhammapālaの著作リストには、Nett-aは最初に挙げられており、ここから本書がDhammapālaの初めての著述であったと推定することができる。Dhammapālaが造論した*Theragāthā-aṭṭhakathā*には、Nett-aへの参照を指示する文がある [R° 3.21] ため、少なくともこのaṭṭhakathāよりは前に著されていたはずである。また、GvにおいてDhammapālaが造論したとされている*Vibhaṅga-anuṭīkā*にも、詳細はNett-aに述べてあるとする記述がある [B° 185] ので、Nett-aはこのanuṭīkāよりも前に著されていたと見るべきである。

本書の結偈 (nigamana-gāthā) には、〈Nāgaと呼ばれる港町 (paṭṭana) の、正法へ入る場所であるDhammāsoka大王精舎に住まう私は [意味の註解に努力した]〉 [B° 275] との文がある。DhammapālaはNāga-paṭṭana (Nāga港町) にあったDhammāsoka大王精舎でNett-aを著した。Dhammāsoka大王精舎とは、Asoka王 (阿育王、無憂王) にゆかりがあるとされて名付けられたものであろう。この精舎に付せられている「正法に入る場所」との形容辞について、Nett-ptは「正法の聴聞・憶持・熟知・遍問・思惟が多い者たちの住まう場所」と説明している [B° 151]。この精舎は、教法の研究に従事する学僧たちが多く住まう学問寺であったと思われる。

Nett-aには、上記の結偈の後に、〈以上、Badaratittha精舎の住人であり専門師 (ācariya) たるDhammapālaがつくった、Nettの意味の注解が、完成した〉 [B° 276] との末文も付せられており、DhammapālaはBadaratittha精舎<sup>(4)</sup>の住人であるとされている。A.D.1862にミャンマーのPaññāsāmiが著した仏教史書*Sāsanavaṃsa* (以下Sās) には、Nett-aを著したDhammapālaは、Sihala島 (セイロン島) にほど近いDamīla王国 (ドラヴィダ王国) のPadaratittha (=Badaratittha) に住まっていたと述べられている。

Padaratitthaについては、従来、インド南東地方Tamil Nadu州のMadras (現 Chennai) の南西約70~80kmにある現Kanchipuram (別称Conjevaram / = Kañcipura, Kāñcipura) を指すとする説がおこなわれている<sup>(6)</sup>。しかし、A.P.Buddhadattaは、BadaratitthaはThanjore Districtの海岸線上にあり、Nāga-

paṭṭanaはThanjoreの34mile東方のCoromandal湾の港であると述べていると言う。<sup>(6)</sup> Thanjore District (Tanjavur Districtとも表記される)の海岸とは、Palk海峡をはさみ、スリランカの対岸に位置する海岸である。この場合のCoromandal湾の港とは、同州Nagapattinam DistrictのNagapattinam (古くはNegapatamとも呼ばれた)を指すものと見てよい。

Dhammapālaが住していたPadaratittha精舎と、Nett-aを著したNāga-paṭṭanaのDhammāsoka大王精舎の場所に関しては、実際どこにあったのか、議論の余地があるようである。Dhammapālaが活躍したA.D.5-6cにおいては、先述のKañcipuraとこのNāga-paṭṭana、そしてKāveri-paṭṭana (Nagapattinam DistrictのPoompuhar)を加えた南インドの3地域が、テラワダ仏教の重要拠点であった。<sup>(7)</sup> このようなテラワダ仏教の拠点地域のどこかにあったのではと思われる。ちなみに、KañcipuraとDhammapālaを結びつける資料としてしばしば引き合いに出される『大唐西域記』<sup>(8)</sup>には、Kañcipura<城の南、遠からざる所に大きな伽藍がある。國中の聡明な人たちが類を以てここに集まって来ている。率堵波の高さ百余尺のものがある。無憂王が建てたものである><sup>(9)</sup>ということが述べられている。このAsoka王が建立した仏塔はKañcipura南方の大僧院にあったものと解釈できるが、となると、この大僧院がNāga-paṭṭanaのDhammāsoka大王精舎であった可能性もある。ところで、Nagapattinamは、距離は相当に離れているが、Kañcipuraの南方に位置する。玄奘の言う「南」とはここを指していた可能性もある。

Nett-aの序偈には、<saddhamma-nettiの久住を期待しているdhammarakkhitaという名の長老により懇請された> [B° 1]とあり、Nett-aがDhammarakkhitaという長老比丘の要請をうけて造論されたことが記されている。このことから、この長老比丘がNettに強い関心を持っていた人物であったことを読み取ることができるであろう。この長老比丘は“saddhamma-netti”の久住を期待してNett-aの造論を要請した。“saddhamma-netti”とは、Nettの主題であるところの“netti” (聖典解釈法)を指す。この序偈の直後において、Nett-aは、この“saddhamma-netti”の語を“netti”を指すものとして用いている [B° 2]。DhammarakkhitaはNettを紐解いたことのある人であったと思われる。そして、そこに示される聖典解釈法の有用性に着目していた学僧であったと考えられる。この長老比丘もインド南東地方に住まっていたと思われる。

ちなみに、Nett-aには、Nett本文についての異読をする「ある人々 (keci)」

や「他の人々 (apare)」のことが紹介され、批判されている<sup>(10)</sup>。このことは、Dhammapālaのいたインド南東地方では、Dhammapālaが被註釈本文としたテキストの読みとは異なる読みを含むテキストを伝えていた者たちが存在したことを示す。

Dhammapālaは、Nett-aを造論するに際して、[A]大寺派決定説 (vinicchaya)、[B]五部 (pañca-nikāya)、[C]Peṭaka (=Peṭakopadesa)<sup>(11)</sup>を依用資料とした [Nett-a B° 2]。ここで注目すべきは[C]である。Nettを註釈するためにPeṭakopadesa (以下Peṭ)を依用したということは、同一主題に対してNettは略説的でPeṭは広説的であったか、あるいは、成立または流伝においてNettは新しくPeṭは古かったからであろう。いずれであれ、Nett-aの依用資料としてPeṭを用いたということは、NettとPeṭの位置付けを考える上で示唆に富む<sup>(12)</sup>。なお、『大智度論』に〈摩訶迦旃延仏在時。解仏語作蜺勒<sup>勅摩訶旃延</sup>。乃至今行於南天竺〉[T25.70a.]とあり、ここでの『蜺勒』は“peṭaka”にその原語が比定されている。Peṭは南インドに流布していたと述べられているが、このことから、Dhammapālaが住していた地域では、Peṭの学習・研究が重んじられていたと言えるであろう。

なお、Nettの一次的義疏が“aṭṭhakathā”と名付けられている点には注意されるべきである。“aṭṭhakathā”は“pāḷi”<sup>(14)</sup>(三蔵聖典)に対する註釈書を指す。Nettは、現行のミャンマーの三蔵組織では経蔵小部に収められている<sup>(15)</sup>が、BuddhaghosaのSamantapāsādikāにおけるBāhiranidāna-kathāの三蔵リストには、Nettは挙げられてない [Cf. R° 1.18]。しかしながら、Nettの一次的義疏を“aṭṭhakathā”と名付けたDhammapālaはNettを“pāḷi”と見做していたと言えるであろう。Nett-aは、Nettを“pāḷi”と呼んでいる (pāḷiyaṃ pana vicinatīti vicayoti ayamatto dassito.) [B° 15]。付言すると、Nett-ptにはPeṭが“pāḷi”であると明確に述べる語句もある [B° 16]。

### 3. *Netti-ṭīkā*

*Netti-ṭīkā* (Nett-pt) は、*Netti-aṭṭhakathā-ṭīkā*とも呼ばれる。同書の末文には“netti-aṭṭhakathāya linatthavaṇṇanā” [B° 151] との名称も見える。本書はNettに対する二次的義疏 (復註) であり、一次的義疏であるNett-aを註釈する。

本書は現存している。刊本としては、ミャンマーBuddhasanasamiti版 (ミャンマー第6結集版、1961)、タイMahachulalongkon Ratchawitthayalai版 (タイ王室版、1995)、タイMunnithi Phumiphalo Phikkhu版 (1982)、インドVipassana

Research Institute版 (1998) がある。

Gvでは、著者はNett-aの著者と同じDhammapālaとされている。<sup>(17)</sup> Sāsには、Dhammapālaの著作としてNett-ptが挙げられていない [R° 33]。本書の著者に関して、A.K.Warderは、自作のaṭṭhakathāにṭīkāを書くという例は上座部の註釈家に関しては恐らく皆無であろうとの理由から、同一人物の手に成るものではないと主張している。<sup>(18)</sup> ただし、Osker von Hinüberは、く同じ人物が自分の註釈書に対して復註を編むというのは稀なことなので、最近の研究はNett-ptがDhammapālaの著述であることを拒否する傾向にある。しかし、SāriputtaがPālimuttakavinaya-vinicchaya-saṅghaに自註を著したことは支持されているのであり、こうしたことはインド文献においては珍しいことではない<sup>(19)</sup> と述べている。

Nett-ptには序文や結偈が付けられていない。また、本文中においても述作経緯や著者情報を引き出し得る記述に乏しい。このため、本書の著者などに關する議論は困難を極める。

Nett-ptの成立に関する手掛かりを与え得るものとして、ひとまず、“vitthāro pana paṭibimbassa udāraṇabhāvasāghanādiko antarābhavakathāvicāro kathāvatthupparakaraṇassa ṭīkāyaṃ gahetabbo.” (なお、反影が喩例であることを論証する中有論の考察は、詳しくは、*Kathāvatthupparakaraṇa*のṭīkāの中で把握されるべきである) [Nett-pt B° 67] という一文を指摘しておきたい。ここでは、パーリ七論中の*Kathāvatthu*のṭīkāが言及されている。*Kathāvatthu*のṭīkāには、Ānandaのmūlaṭīkā (根本復註) と、Gvで上述のDhammapālaの著作とされるanuṭīkā (復々註) がある。前者におけるantarābhava-kathā (中有論) の註釈は短文であり、「反影 (paṭibimba)」という語が見えないが、後者における当該箇所は相当の長文であり、「反影 (paṭibimba)」に関する詳しい論述がある [anuṭīkā B° 122以下]。ミャンマー第6結集版Nett-ptの脚注にもanuṭīkāを指すとの注記がなされている。故に、この一文におけるṭīkāとは、*Kathāvatthu-anuṭīkā* (*Pañcapakarāṇa-anuṭīkā*、すなわち*Pañcapakarāṇa-mūlaṭīkā*のlinatthavaṇṇanāの一部) を指すと考えるのが妥当と思われる。この一文と同じ記述、すなわち、「詳論は*Kathāvatthu*のṭīkāにおいて理解すべし」とする記述は、Dhammapāla造とされる*Udāna-aṭṭhakathā*にも見られる [R° 94]。

Nett-ptに上引の記述があるということは、Nett-ptは*Kathāvatthu-anuṭīkā*の後に著されたことを示す (このことは*Udāna-aṭṭhakathā*についても同様である)。この記述は、既に別人の手によって成っている書の記述を自らが著す書に再録

する労力を省くためのものとも見得るが、同一作者が前に著した書の記述を後に著した書で再説する煩瑣を避けるためのものとも見ることが出来る。後者であるのであれば、*Kathāvatthu-anuṭṭikā*の作者とNett-pt<sub>1</sub>及び*Udāna-aṭṭhakathā*の作者は同一ということになる。

なお、*Vibhaṅga-anuṭṭikā*には“taṃ netti-aṭṭhakathāyaṃ vitthārato vuttameva.”〈それは、詳しくは、Nett-aにおいて既に述べられていることに他ならない〉[B<sup>o</sup> 185]という、Nett-aの作者との同一性を示唆し得る一文がある。この文を有する*Vibhaṅga-anuṭṭikā*の作者と、上述の*Pañcapakarāṇa-anuṭṭikā*の作者が同じであるということが確実となれば、Nett-aとNett-pt<sub>1</sub>が同じ造論者である可能性も高くなると思われる。今後の研究に期待される。

付言すると、Nett-pt<sub>1</sub>にはNett-aとは趣意の異なる註釈をした直後に、“aṭṭhakathāyaṃ pana”〈しかしアッタカターにおいては〉[B<sup>o</sup> 28]として、Nett-aでの註釈を紹介する箇所がある。この箇所は、そこにおける説相は慎重に検討されなければならないが、Nett-aとNett-pt<sub>1</sub>の著者が異なることを示唆するものとなるかもしれない。

Nett-pt<sub>1</sub>の造論時期については、著者がNett-aのそれと同じということになればA.D.5-6c頃となるが、著者の同一性については上述のように猶予がある。*Maṇisāramaṅjūsā-ṭṭikā* (次節を見よ) には“Nettiṭṭikāyaṃ”との典拠表示をともなったNett-pt<sub>1</sub>からの引用がある [B<sup>o</sup> 1.54] ので、Nett-pt<sub>1</sub>の成立年代はA.D.15c中頃よりも以前である。

#### 4. *Nettipakarāṇa-gaṇḍhi*

*Nettipakarāṇa-gaṇḍhi* (Nett-gp) は、作者不詳の註釈文献である。Gvは著者をスリランカ出身の20人の専門師の1人とするのみである。成立年代については、Gvの配列から考えると、A.D.10-12c頃であろう。<sup>(20)</sup>SāsにはNett-gpの名は見えない。本書はNettの難解語句に限って説明をほどこすものであり、いわゆるgaṇḍhi-pada (またはgaṇṭhi-pada) 文献類に属する。

このNett-gpは現存しない。ミャンマーでAriyavaṃsaが著した*Maṇisāramaṅjūsā-ṭṭikā*に、“evaṃca katvā **nettigaṇṭhipade** “anubalappadāyakanti ca upatthambhakameva vuccati, tañhi yathāladhasampattijanakakamassa taṃ sampattim ciraṭṭhitikaṃ karontameva balānuppadāyakaṃ nāma hotī ti vuttaṃ.” [B<sup>o</sup> 1.55] とあり、その脚注には出典は明示されず、“gavesitabbaṃ”〈探すべし〉とある。*Maṇisā-*

-ramañjūsā-ṭīkāは、同書ミャンマー第6結集版のnidāna-kathāにsakkārāja暦828年 (A.D.1466) に著されたとあるので [B° kha]、A.D.15cの半ば頃にはNett-gpはミャンマーに存在していた。<sup>(21)</sup>

## 5. *Netti-vibhāvinī*

*Netti-vibhāvinī* (Nett-ṭ) は、*Netti-vibhāvinī-ṭīkā*とも呼ばれる。Nett-ṭはミャンマーにおいてMahādhammarājaguruの称号を持つSaddhammapālaによって著されたNettに対する註釈書である (Nett-aに対する註釈書ではない)。Nett-aを踏まえながらNett本文を註釈している。Nettの本文に対して、ときにNett-aよりも詳細な註解をほどこしており、極めて有益な註釈書である。Gv (A.D.16c)<sup>(22)</sup> 及びSās (A.D.19c) には、Nett-ṭに関する言及が存在しない。

本書は現存している。刊本としては、ミャンマーBuddhasanasamiti版 (ミャンマー第6結集版、1961)、タイMahachulalongkon Ratchawitthayalai版 (タイ王室版、1995)、タイMunnithi Phumiphalo Phikkhu版 (1982)、インドVipassana Research Institute版 (1998) がある。

Nett-ṭの末部には、sakkārāja暦926年、ミャンマー暦5月の白分9日の日出の時刻に著されたとある [B° 355]。この年はA.D.1564に当たる。なお、結偈にはミャンマー仏暦2108年のミャンマー暦5月9日の日出の時刻に著されたとある [B° 356] が、ミャンマーの仏暦は5月の白分満月に新年となるので、白分9日の時点では精確には仏暦2107年としなければならない。Nett-ṭの著述年はこのA.D.1564であるが、Somapala Jayawardhanaは、W.Geigerの*Palī Language and Literature*<sup>(23)</sup>に基づき、Nett-āはA.D.15cに書かれたと述べるが、これは訂正される必要がある。<sup>(24)</sup>

NettのPTS版校訂者E.Hardyは、その*Introduction*の中で、〈Mahādhammarāja王の治世に、SamantapālaによりビルマでA.D.16c後期の第3期間に編纂された〉[Nett R° xxxv-xxxvi] とするṭīkāのことを紹介しているが、これはNett-ṭを指しているようである。年代は正しいが作者名が間違っている。また、NettのPTS版英訳の“*Translator’s Introduction*”において、英訳者のÑāṇamoliは〈15世紀(?)にビルマで書かれた復註(Ṭīkā)もある<sup>(25)</sup>と述べているが、この「復註」とは、Nett-ptではなく、Nett-ṭを指すと見るべきであろう。

Nett-ṭは、序偈によると、Mahādhammarāja王の大臣であるAnantasutiという人物の要請により著された [Nett-ṭ B° 1]。このMahādhammarājaとは、ミャンマ

一のToungooの王 (A.D.1584-1609) を指す<sup>(26)</sup>。このToungoo王朝期はミャンマーにおいて教法研究が活発になった時期である。著作地は、Saddhammapālaという比丘がこの王の師であったことを考えると、ミャンマーの歴史資料を精査する必要はあるのであるが、ひとまずToungoo (တောင်ငူ) ではなかったかと思われる。

この序偈には、“yena racitā netti, yena sā anumoditā, yehi saṃvaṇṇanā katā, tesaṇubhāvanissito. kiñci kiñci saritvāna...karissam” 〈私はnettiを著した者、これを随喜した者、諸々の註解をつくった者たち、彼らの威神力に基づき、各々のことを憶念して・・・著そう〉 [B° 1] という一文がある。ここで注目すべきは下線部である。この下線部における「諸々の註解」とは先行のNettの註釈文献類を指すと思われるが、これが具体的に何と何を指しているのかは分からない。

なお、Nett-ṭにはNett-aからの引用が数多く存在する。詳細はNett-aに述べられているとして、註釈文を簡略にしていることもある。Nett-ṭは、Nett-aを引く際に、多くは“aṭṭhakathāyaṃ”として引用するが、Nett-aの藏論者Dhammapālaをaṭṭhakathācariyaと呼び、“teneva vakkati aṭṭhakathācariyo” [B° 2] や“tenāha aṭṭhakathācariyo” [B° 3,47,64,152,175,315] として、Nett-aを引用している場合もある。また、Nett-ṭにはNett-pṭ<sup>(27)</sup>からの引用文も存在する。ただし、Nett-gpからの引用と思しき記述は見出されないようである。

さらに付言すると、Nett-ṭには、“peṭake”との典拠表示を伴ったPeṭからの引用が2箇所存在する [Nett-ṭ B° 65,66]。

Nett-ṭでは、各々の章節の末部に、“paṇḍitehi pana aṭṭhakathāṭīkānusārena gambhīrattho vitthāro vibhajitvā gahetabbo.” 〈なお、賢者たちは、aṭṭhakathāとṭīkāにしたがって深遠な意味の詳細を分析して把握すべきである〉という一文が付せられている。自らの著したNett-ṭのみに依拠するのではなく、Nett-aとNett-pṭを参照してNett本文の意味を理解すべきであると、読者に注意しているのである。

## 6. Peṭakālaṅkāra

Peṭakālaṅkāra (Nett-mḥ) は、Dhammasenāpati-mahādhammarājādhirāja-jaguruとの称号を持つ、ミャンマーのÑāṇabhivamsaによって著されたNettの註釈書である (これもまたNett-aに対する註釈書ではない)。SāsにはNett-mḥの名が現れるが、Gvには見えない。Nett-mḥが現存するの否かは分からない<sup>(28)</sup>。

Sāsによると、Ñāṇabhivamsaは、受具足後5年目に、“nettisaṃvaṇṇanā-

abhinavaṭīkā”〈Nettの註解としての最新復註〉であるところの本書を著し、受具足後8年目のKaliyuga1150年(A.D.1788)にSaṅgharāja(僧伽王)の地位に就いたとのことである[R°134]<sup>(29)</sup>。သာသနာလင်္ကာရစာတမ်းには、ビルマ暦1151(A.D.1789)にNāṇabhivamsaがသာသနာ့ဇိ (法主=Saṅgharāja)の地位に任命されたこと、受具足後5年目にNettの中に含まれる譬喩品の註釈をし、受具足後6年目にNettの新復註である本書を編纂したこと、古復註5支分があったがそれよりも本書は広義であったので“Mahāṭīkā”〈大復註〉との呼称が碑文にあるということが、各々述べられている。<sup>(31)</sup> Niharranjan Rayは、受具足後5年以内にNett-mhṭを著し、18年目にSaṅgharājaに就任したと述べている。<sup>(32)</sup> 精確な著述年は不明であるが、A.D.18cの終わりごろに造論されたと言えるであろう。この時期はKonbaung王朝のBodawpaya (ဆိုးတော်သူရာဇ) 王治世の時代(A.D.1781-1819)に位置する。

သာသနာလင်္ကာရစာတမ်းが言うところのNettの古復註5支分とは、Nett-mhṭが著された当時にミャンマーに存在していたNettの復註類5典籍を指すと考えるが、その銘々の書目は詳らかでない。

書名のPeṭakālaṅkāraとは「peṭakaの莊嚴」を意味する。Nettの註釈文献にこのような名称が与えられたということは、極めて興味深いことである。Nettの典籍名中の“netti”(=九種経を探求するもの)もPeṭの典籍名中の“peṭaka”(三蔵の意味を論ずるもの)も、ともに「聖典解釈法」を意味する。NettもPeṭも釈尊在世時の仏弟子Mahākaccāna/Mahākaccāyanaの説示を淵源として成立した論書であるとされ、<sup>(33)</sup> 16 hāraや5 nayaなど、聖典を表現(vyañjana)と意味(attha)の2方面において検討して解釈する方法を説く。こうした点において、“netti”の語も“peṭaka”の語も同義であると言えるのであるが、Nāṇabhivamsaは敢えて後者の語を用いてNettの註釈書名とした。その理由が分かれば面白いと思う。

本書には2つの別名がある。本書はNetti-abhinavaṭīkāとも呼ばれる。上引のSāsでは“abhinavaṭīkā”〈最新復註〉とされていた。本書はNetti-mahāṭīkāとも呼ばれる。သာသနာလင်္ကာရစာတမ်းでは“mahāṭīkā”〈大復註〉との呼称が碑文にあるとされていた。1906年にミャンマーで著された仏教書目録ဝိမ္မာရစာတမ်း<sup>(34)</sup>ではဝေဇ္ဇာမဟာဇိကာဝေဇ္ဇာとも呼ばれている[No.230]。

## 7. むすび

以上がNettの註釈文献5種に関する、筆者(古山)が目下のところ知り得ている情報に基づいた解題である。なお、Nettの註釈文献に関連する註釈文献に *Peṭakopadesa-ṭīkā* (以下Peṭ-ṭ) があるが、このことについてここで述べ添え、本稿を終えることとしたい。

Peṭ-ṭは“ṭīkā”とされているが、Peṭに対する最初の註釈書である。PeṭはNettと同一主題を扱う姉妹書である。Gvには、UdumbaraがPeṭ-ṭをMakva市で著したとある<sup>(35)</sup>。Vipassana Research InstituteのChatṭha Saṅgāyana CD-ROMに収められている *Cūḷaganthavaṃsa* には、UdumbariがPukkāmanagaraにおいて“Peṭakopadesassa ṭīkā”を著したとある。Pakudhanagaraはミャンマーの都市であり、Pukkā [-nagara] はミャンマーのBagan (ခု) であるという。筆者が思うに、Makva市はBaganより120Kmほど南にあるMagwe (မေ့) ではなかろうか。Gvの中では先述の *Maṇisāramañjūsā-ṭīkā* の作者であるAriyavaṃsaの著作リストの直後にPeṭ-ṭが置かれており、その著述年はA.D.15c中頃からA.D.16cの中頃(遅くともA.D.17c)と思われる。本書が現存しているかは分からない。

(2006年6月6日脱稿)

## 略号

B° : ミャンマー (ビルマ) 第6結集版、R° : London/Oxford PTS版、T : 大正新脩大藏経

## 註

- (1) 他に、スリランカのK.Upatissa Mahā Theraが著した *Nettiratnākāra* (A.D.20c)、スリランカのĀcariya Dharmānanda Sthavīraが著した *Nettipradīpaya* (著述年代不詳) がある (Cf. 佐藤良純「Nettipakarāṇaについて」『印度學佛教學研究』12-2、1964年)。古くからNettの研究が盛んなミャンマーでは、Nettのnissaya (仏典逐語句釈) が造られている。Sāsには、A.D.15c頃に、MahāsilavaṃsaがNetti-pāliの *atthayojanā* をミャンマー語で著したとある [R° 99]。atthayojanāとは「語義の列挙 (အနက်တို့ယူ၍ပြော)」を意味する (ဦးထွန်းစိန်. ၁၉၅၆။ ယူဆောင်မှု။ ပါဠိ-မြန်မာအဘိဓာန်. Yangon : ဝိသုတဗျူဟာအဖွဲ့ & ချစ်သာစေတီ. 1999.p.38b (ウー・ホウッセイン『パーリ語=ミャンマー語辞典』))。このatthayojanāがnissayaに相当する。Sāsの下地となったミャンマー語の史書 သာသနာလောကရာဇာတိ : 対応箇所では、この長老はNetti-nissayaを編んだとある (Cf. 池田正隆「サーサナーランカーラ・サーダン (Sāsanañāikāra cātām:) —ビルマの仏教史に関する伝承の記録—

[8] 『佛教研究』27、1998年p.244；生野善應『ビルマ上座部佛教史』、山喜房佛書林、1980年p.211)。また、Sāsには、A.D.17c頃に、Pubbārāma僧院の住者が Netti-pāḷiの語義 (attha) をミャンマー語で列挙した (yojesi) とある [R<sup>e</sup> 116]。သီလနာလ ကာရောဓိ: の対応箇所では、Nettのnissayaを編纂したとある (Cf. 池田正隆「サーサナーランカーラ・サーダン (Sāsanāḷankāra cātam:) —ビルマの仏教史に関する伝承の記録— [9]』『佛教研究』30、2001年pp.123-124；生野上掲書p.246)。また、筆者が最近ミャンマーを訪問した際に、Nettīhārabodhiという、151頁のミャンマー語の書を手に入れた。著者はGuṇissaraという比丘 (Dhammācariya, Pāḷipāragū) で、2001年にသီလနာလ ကာရောဓိ: を版元として出版された。本書は、Nettにおける16 hāraの要点を解説するものである。

- (2) この拙稿の題名における「ティーカ」の語は間違いであることをここに記しておく。筆者は“ūkā”をカタカナ書きにより音写して「ティーカー」と記したつもりであったが、校正作業における見落としとして、このような間違いが生じてしまった。責任はすべて校正にあたった筆者にある。ここに訂正してお詫びしたい。また、同拙稿p.212に、Sāsの著者と သီလနာလ ကာရောဓိ: の著者が同じであると述べたが、これは筆者の勘違いである。သီလနာလ ကာရောဓိ: の著者はNāṇabhivamsaである。併せて訂正しお詫びしたい。
- (3) Dhammapālaの詳細については、森祖道『パーリ仏教註釈文献の研究—アッタカタターの上座部的様相—』、山喜房佛書林、1984年pp.530-539を参照されたい。森祖道は、同書において、Dhammapālaの活躍年代について、く・・・ダンマパーラの年代についてであるが、これには明確な手懸りは得られない。但し、既に触れている様にダンマパーラの著作にはブッダゴーサの著作が引用言及されているが、その逆の例は見られない事より考えて、ダンマパーラがブッダゴーサよりは後代の人であった事は確かである。従来の諸説は大體、彼を5C.後半期、或いは5C.第四・四半期頃に活躍した人としているが、最近の説としては、Pierisは6C.後半 (または7C.初頭) としており、またNormanは多分6C.中頃ではないかと述べている (pp.537-538) と結論している。
- (4) Dhammapālaが造論したとされる諸atthakathāには、各々次のような末文が付されており (いずれもB<sup>e</sup>による)、Badaratittha精舎の住人であることが示されている。Udāna-atthakathāには“badaratitthavihāravāsīnā dhammapālattherena katā udānassa atthakathā samattā”、Itivuttaka-a<sup>o</sup> には“badaratitthavihāravāsīnādhammapālattherena katā itivuttakassa atthakathā samattā”、Vimānavatthu-a<sup>o</sup> には“badaratitthavihāravāsīnā ācariyadhammapālena katāya paramatthadīpaniyā khuddaka-atthakathāya vimānavatthu-atthavaṇṇanā niṭṭhitā”、Petavatthu-a<sup>o</sup> には“iti badaratitthavihāravāsīnā munivarayatīnā bhadantena ācariyadhammapālena katā petavatthu-atthasaṇṇaṇā niṭṭhitā”、Theragāthā-a<sup>o</sup> には“badaratitthamahāvihāravāsīnā ācariyadhammapālattherena katā theragāthavaṇṇanā niṭṭhitā”、

*Therīgā-thā-a*<sup>o</sup>には“badaratitthavihāravāsina ācariyadhammapālattherena katā therīgāthānaṃ aṭṭhasaṃvaṇṇanā niṭṭhitā.”、*Cariyāpīṭaka-a*<sup>o</sup>には“iti badaratitthavihāravāsina ācariyadhammapālena katā cariyāpīṭakavaṇṇanā niṭṭhitā.”とある。*Visuddhimagga-mahāṅkāla*には、“badaratitthavihāravāsina ācariyadhammapālattherena katā paramatthamañjūsā nāma visuddhimaggamahāṭīkā samattā.”とある。

- (5) 例えばB.C.Law. *A History of Pāli Literature*. New Delhi : Rekha Printers Pvt. Ltd. 2000(Rep.). p.394など。
- (6) Cf.Somapala Jayawardhana. *Handbook of Pali Literature*. Colombo : Karunaratne & Sons Ltd. 1994. p.48 (Dhammapāla)。ここではA.P.Buddhadatta.*Corrections of Geiger's Mahavamsa*. Ambalangoda: Ananda Book Company. 1957.pp.189-197の記述が紹介されている。
- (7) Cf. Kanai Lal Hazra. *History of Theravāda Buddhism in South-East Asia*. New Delhi : Munshiram Monoharlal Publishers Pvt. Ltd.. 1981. pp.64-65
- (8) 『大唐西域記』：<達羅毘荼國。周六千餘里。國大都城號志補羅。周三十餘里。土地沃壤稼穡豐盛。多花果出寶物。氣序溫暑風俗勇烈。深篤信義高尚博識。而語言文字少異中印度。伽藍百餘所。僧徒萬餘人。皆遵學上座部法。天祠八十餘所。多露形外道也。如來在世。數遊此國說法度人故無憂王於諸聖迹皆建窣堵波。志補羅城者。即達磨波羅<sup>唐言譯法</sup>菩薩本生之城。菩薩此國大臣之長子也。幼懷雅量長而弘遠。年方弱冠王姬下降。禮筵之夕憂心慘悽。對佛像前殷懃祈請。至誠所感神負遠遁。去此數百里至山伽藍。坐佛堂中有僧開戶。見此少年疑其盜也。更詰問之。菩薩具懷指告。因請出家衆咸驚異。遂允其志。王乃宣命推求遐邇。乃知菩薩神負遠塵。王之知也增深敬異。自染衣已篤學精勤。令問風範語在前記。城南不遠有大伽藍。國中聰叡同類萃止。有窣堵波。高百餘尺。無憂王所建也> [T 51.931b-c]。なお、ここにある「志補羅」は「建志補羅」と訂正されるべきである。『大慈恩寺三藏法師伝』には、<至達羅毘荼國。<sup>南印度城</sup>國大都城號建志補羅。建志城即達磨波羅<sup>唐言譯法</sup>菩薩本生之處。・・・建志城即印度南海之口。向僧伽羅國水路三日行到> 云々 [T50.241c] とある。
- (9) 水谷真城訳『大唐西域記 (中国古典文学大系第60巻)』、平凡社、1972年 (再版) p.336
- (10) 例えば①“sadā naramanussāti keci paṭhanti, taṃ na sundaraṃ.” [Nett-a B° 7]、②“apare pana taṃ tassa sāsanaavaranti paṭhanti, tesam matena yaṃ-saddo sāsana-saddena samānādhikaraṇāti daṭṭhabbo.” [Nett-a B° 8]、③“keci nayo cāti paṭhanti, taṃ na sundaraṃ.” [Nett-a B° 12]、④“keci vitthāranayāti paṭhanti, taṃ na sundaraṃ, ayañca gāthā kesuci potthakesu natthi.” [Nett-a B° 17]、⑤“keci assādā dīnavato ti paṭhanti, taṃ na sundaraṃ.” [Nett-a B° 19]、⑥“keci pana teneva brahmacariyenāti paṭhanti, tesam matena siyā tassa paṭikkhepo.” [Nett-a B° 111]。

なお、Nett-aにおけるNett本文の異読紹介については、PTS版のIntroductionに示されているE.Hardyの調査結果がある [Nett R° xxxvi-xxxviii]。

- (11) 書名としてのPeṭakaとPeṭakopadesaの同一視に関しては、拙稿「Peṭakopadesaはpeṭakaのupadesa (註釈) か」『佛教研究』32、2004年を参照されたい。この拙稿でも述べたが、現存Peṭは、atthakathā文献の作者または編纂者が参照していたものがそのまま残ったものではないので、注意が必要である。
- (12) NettとPeṭの関係には今後さらに検討を重ねる必要があるが、ここでK.R.Normanの説を紹介しておく、氏は〈Peṭに見出されるがNettには見出されない題材 (*material*) は、それが損耗部分であることを正当化する方法にとって、それほど重要ではないように思える。両書に見出される題材 (*material*) は、Nettにおいては改良された形で存在するようになる。ゆえに、一方のテキストは他方の続編ではなく、NettはPeṭの書き直し版 (*rewritten version*) であると結論付けるのが正しいように思える〉(K.R.Norman. *Pāli Literature, Including the Canonical Literature in Prakrit and Sanskrit of All the Hīnayāna School of Buddhism*. Wiesbaden : Otto Harrassowitz. 1983. p110) と述べている。NettがPeṭの書き直し版であるとする、Nett-aを著す際にPeṭを参照した理由は理解し易い。なお、両書の新古についての議論は拙稿「“netti”と“Netti-pakarāṇa”」でも取り挙げている。
- (13) Cf. 荻原雲来「有空等の四門に就いて」『荻原雲来文集』、荻原雲来記念会、1938年pp.206-211.; 印順 (述意)、昭慧 (整理)、岩城英規 (翻訳) 『『大智度論』の作者とその翻訳』、正観出版社 (台湾)、1993年p.75。なお、印順は「蜺勒」の原語をkaraṇḍaとpeṭakaの2つに想定している。
- (14) 森祖道「アッタカター文献の種類範疇」『印度學佛教學研究』25-1、1976年では、Nett-aは、「パーリ三蔵の基本的註釈書及びVisuddhimagga」にはなく、「その他の第一次註釈書」に分類されている。ここでは、DhammapālaはBuddhaghosaと同時代人である点から観て、Nett-aは前者の分類に準ずるものと考えられようと述べられている。
- (15) ミャンマーではNettの他に、*Milindapañha*、*Suttasaṅgaha*、Peṭをも小部に収録する (Cf. M.H.Bode. *The Pāli Literature of Burma*. Rangoon : Burma Research Society. 1965. pp.4-5)
- (16) なお、『善見律毘婆沙』の対応箇所にもNettの名は見出されない [Cf. T24.675c-676a]。
- (17) Cf. Asha Das. *The Glimpses of Pāli Literature (Gandhavamsa)*. Culcutta : Punthi Pustak. 2000. p.20 ; 片山一良「『パーリ語文献史』和訳・索引 (GANDHAVAMSA)」『佛教研究』4、1974年pp.119-118。なお、このGvとは精確にはCulla-gandhavamsaである。
- (18) 森前掲書pp532-533。ここで紹介しているのはA.K.Warder. 'Some Problems of the

- Later Pali Literature'. *The Journal of the Pali Text Society* vol.IX. 1981. pp.201-203の記述である。
- (19) Oskar von Hinüber. *A Handbook of Pāli Literature*. Berlin. Walter de Gruyter & Co. 1996. p.169
- (20) Cf. 片山前掲訳pp.79-78
- (21) Cf. Sās R° pp.95-98 ; 生野前掲書pp.205-208 ; 池田正隆「サーサナーランカーラ・サーダン (Sāsanālaṅkāra cātam:) —ビルマの仏教史に関する伝承の記録— [8]」『*佛教研究*』27、1998年pp.238-242
- (22) Gvの成立年代については、M.H.BodeのA.D.17cとする推定が通説となっているようである (M.H.Bode前掲書p.x)。これに対して片山一良は、Gvに現れない文献の年代から上限を考察し、その成立年代はA.D.15c後半からA.D.16c半にかけてであろうという推定が成り立つとし、A.D.16cと見るのが妥当であると述べる (片山前掲訳p.138)。筆者は片山説を支持する。
- (23) Cf. 伴戸昇空訳『PĀLI 文献と言語』、Abhidharma Research Institute (京都)、1987年p.49
- (24) Somapala Jayawardhana前掲書p.194。ただし、著者のSaddhammapālaについてはA.D.16cに属するビルマのNarapati王と同時代人であると述べている (同書p.197)。ミャンマーのInnwa (Ava) 王朝時代には2人のNarapati王がいた。Narapati I世はA.D.1442-1468の人で、Narapati II世はA.D.1501-1525の人である。後者を指しているのであろうか？。
- (25) According to Kaccāna Thera. *The Guide (Nettipakarāṇa). Translation series, No.33*. Trans. Bhikkhu Nāṇamoli. London : The Pali Text Society, 1977. p.x
- (26) Mahādhammarāja王 (ミャンマーではမဟာသမ္မာရာဇာ [マハーダンマヤーザー] と呼ばれる) はToungooの王である。ウー・ペーマウンティン著、大野徹監訳『ビルマ文学史 (東南アジアブックス109ビルマの文学16)』、井村文化事業社、1992年p.490 (注59マハーダンマヤーザー) には、〈タウンゲー宮殿を建て、金箔を施した。それで、シュエナンティー王と呼ばれる。本名はミンイエーティーハトウ。タウンゲーのミンガウン王の長男でナッシンナウンの父〉とある。
- (27) Nett-ṭにおける“ṭikāyaṃ”の語を伴った引用のうち、“samūhādiṃ upādāya”云々 [Nett-ṭ B° 24→Nett-pt B° 25]、“nāmaṃ nāmapaññatti”云々 [Nett-ṭ B° 171→Nett-pt B° 71]、“dassana-pahātabbānañhi”云々 [Nett-ṭ B° 172→Nett-pt B° 72]、“kusaladhammārammaṇāti”云々 [Nett-ṭ B° 228→Nett-pt B° 89] はNett-ptからの引用である。
- (28) 橘堂正弘『スリランカのパーリ語文献』、山喜房佛書林、1997年p.60に、A.P.Buddhadattaの*Pāli Sāhityaya*に挙げられているṭikāやanuṭṭikāの書名が紹介されているが、そこに*Nettipakarāṇa purāṇa-ṭikā* (*Nettivibhāvanī, Līnatthavarmaṇā*) と*Nettipakarāṇa abhinava-ṭikā* (*Peṭakālaṅkāra, Netti-mahāṭikā*)

の2書の名が見えるが、いずれも「未出版」とされている。

- (29) Cf. 生野前掲書p.277
- (30) ここに言う「Nettの譬喩品」が何を指すかに付いては不明。現存のNettには譬喩品などという章は存在しない。原文を再検討する余地があるが、手元に原典が無いので今後の課題である。
- (31) Cf. 池田正隆「サーサナーランカーラ・サーダン (Sāsānālāṅkāra cātama) — ビルマの仏教史に関する伝承の記録— [9]」『佛教研究』30、2001年pp.150-151
- (32) Niharrajan Ray. *An Introduction to The Study of Theravada Buddhism in Burma*. Bangkok : Orchid Press. 2002(Rep.). p.234
- (33) Nettの末文には“ettāvatā samattā netti yā āyasmatā mahākaccānena bhāsītā bhagavatā anumoditā mūlasaṅgītiyaṃ saṅgītā ti.” <Mahākaccānaが説き、世尊が随喜され、根本合誦で合誦されたところのnettiは以上で完成した> [R° 193] とある。Peṭの第1地Ariyasaccapakāsanaの章末に“peṭakopadesa mahākaccāyana bhāsīte paṭhamabhūmi ariyasaccapakāsana nāma.” <Mahākaccāyanaが説いたPeṭにおける「聖諦の顯示」と名付けられる第1地> [R° 22] とあり、第3地Sattādhīṭṭhāna (B°での章名はSuttādhīṭṭhānaとなっている)の章末に“iti therassa mahākaccāyana jambūvanavāsino peṭakopadesa tatiyabhūmi sattādhīṭṭhānaṃ nāma.” <以上、ジャンブー林の住人であるMahākaccāyana長老のPeṭにおける「経の確立 (B°ではsuttādhīṭṭhānaṃとなっており、今はこれを採る)」>と名付けられる第3地> [R° 73] とあり、また、第4地Suttavicyayaの章末に“therassa mahākaccāyanassa suttavicyaya nāma catutthabhūmi.” <Mahākaccāyana長老の「経の吟味」と名付けられる第4地> [R° 80] とある。
- (34) Cf. Kanai Lal Hazra. *The Buddhist Annals and Chronicles of South-East Asia*. New Delhi : Munshiram Manoharlal Publishers Pvt. Ltd. 2002. pp.93-94
- (35) Cf. Asha Das前掲書p.54,66 ; 片山前掲訳p.113,123. 原文は“peṭakopadesassa ṭīkaṃ udumbara-nāmācariyo akāsi. taṃ pana pakudhanagaravāsī abhidhammasaṃgahassa ṭīkā...” (Asha Das前掲書p.25) である。この文の読み方について、片山訳には <底本ではPakudhanagaravāsīなる語は、次のAbhidhammasaṃgaha-ṭīkā以下と関わるように置かれているが、文意不明の為、ここでは直前にあるUdumbaranāmācariyoのappositionと読む> との注記がなされている (p.123)。Asha Das前掲書では、上記のようにPakudhanagaravāsīをAbhidhammasaṃgaha-ṭīkā以下と関わるように区切り、訳している (p.54)。
- (36) G.P.Malalasekera. *Dictionary of Pāli Proper Names*. 3vols. Oxford : The Pali Text Society. 1997. Vol.2, p.90 (Pakudhanagara) & p.213 (Pukkāma)